

SINAPIS



社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

年間テーマ「今こそ、戦争を未然に防ごう！」

Vol.
123

2026. 8



撮影：大島 智広さん（写真家）

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@ostk.catholic.jp
ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>



沖縄平和巡礼に参加して



平和の礎

デ・グスマン エリック バウチスタ神父

2026 年 6 月 22 日から 23 日にかけて、沖縄戦終結 81 年の「沖縄慰霊の日」平和巡礼に、大阪から参加した。今回の巡礼は、戦争の悲惨さを学び、犠牲者を追悼し、平和への決意を新たにする貴重な機会となった。初日からは松浦謙神父様とともに沖縄へ向かった。最初に那覇司教座聖堂である開南教会でミサに参加し、東京教区世田谷教会の小西神父様が司式された。小西神父様は毎年巡礼団を率いて沖縄慰霊の日に参加されており、平和への強い思いが伝わってきた。

昼食後は平和祈念公園を訪れた。約 20 万人に及ぶ沖縄戦犠牲者の名前が刻まれた「平和の礎」が並ぶ光景は圧巻であり、その中には 2 名の司祭の名前もあった。当時、日本とアメリカの司祭たちが、互いに司祭であることを知らずに戦場で戦わなければならなかったという話を聞き、戦争が人間の尊厳や信仰さえも引き裂く現実
に胸が痛んだ。

続いて、糸数アブチラガマを訪問した。暗い洞窟内は住民や負傷兵の避難場所となっていたが、灯りもなく、隣の人が誰なのか、生きているのか亡くなったのかさえ分からない状況だったという。当時の証言から、声が聞こえなくなった人は亡くなったと思うしかなかった過酷な現実を知った。

夜は国際通りで沖縄料理を頂きながら、琉球舞踊「日傘」「四つ竹」「鳩間節」を鑑賞した。また巡礼団の方々と
の交流も深まり、平和への思いを分かち合う時間となった。

宿泊は小禄教会だった。翌 23 日早朝 6 時、ウェイン那覇司教様司式による平和巡礼開会ミサがささげられ、他宗教の代表者もお見えになった。その後、小禄教会から魂魄の塔まで約 15 キロの平和巡礼ウォークが行われた。途中 3 か所の休憩所で水や果物などの支援を受けながら、沖縄戦体験者の証言を聞いた。その歩みはまるで主イエスの十字架の道行きを思わせるものだった。

正午ごろ魂魄の塔に到着し、祈念行事に参加した。若者たちによる祈りとウェイン司教様のメッセージが朗読され、「戦争は悪であり、平和こそ私たちが歩むべき道である。そして神から与えられる真の平和を常に求め続けなければならない」という言葉が特に心に残った。

また今回の巡礼では、大阪教区司祭で沖縄戦の犠牲となった森五百枝神父について学んだほか、「月桃の花」の歌や摩文仁の丘、さらにはひめゆり学徒隊の歴史にも触れた。若い学生たちが戦場へ動員され、多くの命が失われた事実は、戦争が未来を奪うものであることを改めて教えてくれた。

1 泊 2 日の巡礼は体力的には大変であったが、それ以上に平和の尊さを実感する旅であった。沖縄の人々が受け継いできた平和への願いを忘れず、戦争の記憶を次世代へ伝えながら、世界の平和のために祈り続けたいと思う。多くの方に、一度は沖縄慰霊の日の平和巡礼に参加されることを心からお勧めしたい。

「秘密戦」の拠点^{のぼりと}「登戸研究所」から学ぶ

フリーライター ^{おおもと}大元 ^{あさみ}麻美

4年前のロシアのウクライナへの軍事侵攻や、今年2月、イスラエルと米国が始めたイランへの攻撃などで、戦争に対する感覚がマヒしてくるような世相だが、戦争が始まれば、やがて国家は勝つためにどんなに残酷な手段でも使うようになる。

その証拠が、現在、川崎市多摩区の明治大学・生田キャンパス内に残されている。

同キャンパスは、1939年に創設された旧日本陸軍の「登戸研究所」（正式名称：第九陸軍技術研究所）があった場所だ。

アジア太平洋戦争下、33万平方メートルの敷地に約100棟の建物が存在していたが、老朽化等により現存するのは1棟のみだ。その1棟が「明治大学平和教育 登戸研究所資料館」として活用されている。資料館では、世界的にも珍しい、国際法違反とされる旧日本軍の「秘密戦兵器」が展示・紹介されている。

「秘密戦」とは、国家の関与を隠蔽して、戦局を有利に働かせようとする、水面下で行われる戦争の総称を意味するものだが、登戸研究所は、まさに「秘密戦兵器」の開発拠点だった。中国経済を攪乱させることを目的とした偽の中国紙幣製造をはじめ、「敵国」の農作物を壊滅するための細菌の開発、また「敵国」

に大打撃を与える風船爆弾、さらに暗殺用毒物やスパイが使用する携帯用武器などの研究が行われていたのだ。

日本の敗戦と同時に、登戸研究所

の活動証拠は隠滅され、技術将校や技師、雇員、工員などの元所員たちは皆、口を閉ざした。

そのうちの一人、^{ばんしげ お}伴繁雄さんも「俺は死んだって口にできないことがある」と長年苦悩していたが、1980年代後半、戦争体験者への聞き取り活動をしていた高校生たちとの出会いをきっかけに、伴さんは、国家の機密事項をぼつりぼつりと話し始めることになる。そして1993年に登戸研究所の体験を原稿に書き終え、肩の荷を下ろしたように、その直後に急逝した。

その原稿は紆余曲折を経て、2001年に『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版）として出版され、登戸研究所の全貌が明らかになっていく。

伴さんは、技師として、登戸研究所の毒性化合物研究室に異動を命じられ、「飲食物に混入しても疑いを持たれない謀略用毒物」の試作開発に力を注いだ。そして1941年、参謀本部から南京への出張を命じられる。目的は南京での人体実験。つまり、中国軍捕虜と一般死刑囚に試作毒物を注入し、その性能・効果を見る実験に立ち会うことだった。

戦争が始まれば、兵士だけでなく科学者などの専門家や一般市民も、否応なくその渦に巻き込まれ、もはや抗うことはできなくなる。

そして、それまでは世の中に貢献していると“自負”してきた誇り高き専門家も「加害者」へと転落させられていく。

この資料館を訪れる度に肝に銘じることがある。絶対戦争はしないことだ。そして戦争を始めさせないことだ。その気配を感じたら、それを阻止する行動を世の中に呼びかけよう。今が、まさにその時なのかもしれない。



「教皇シオ 14 世に学ぶ平和」 報告

事務局 おおもり ゆうじ 大森 雄二

台風直撃の中、酒井司教に「どんなに少人数でも来られた方と開催しましょう」と励まされたつどいは、例年と変わらない 60 名に迫る参加者との出会いの場となりました。

トランプ米大統領の移民政策に対し、「非人道的」という言葉で、それまでの慎重な姿勢から一転して厳しい批判を始めた教皇は、4 月の「平和のための夕の祈り」では「力の誇示も、戦争も、もうたくさんです」と声をあげました。そんな教皇に学びたい思いから、今回のテーマを決めました。

【講話で酒井司教】は、教皇のパーソナリティとして、数学の教師であったこと、南米ペルーでの宣教が長かったことを紹介されました。次に、教皇フランシスコが準備し、レオ 14 世が完成させた使徒的勧告『わたしはあなたを愛している』について、「貧しい人の優先的選択」という教会の使命を、聖書の教えと教会の歴史の中から解説されました。印象深かったのは、貧富の差と政治的な対立という、中南米の現実に向き合ったラテンアメリカ司教会議の影響に言及されたことでした。「構造的な不正義」に対峙するために、これまでの教皇が出された社会教説を土台として、慈善を超えた具体的な愛の実践が教会に求められています。

教皇の平和に関する発言からは、「この緊張と紛争の時代においても、平和は、平和を奪われた人々の叫び声にわたしたちが耳を傾けるならば可能です。——罪のない子どもたち、苦悩のうちにいる母親と父親、虐待された受刑者、避難民、あらゆる年齢の苦しむ人々の叫び声に。彼らのすべてが発することばはただ一つ、平和です。」と語り、世界の指導者たちには「再軍備や死を招く作戦を決定するテーブルではなく、対話と仲介のテーブルに着いてください」と訴え、私たちには「心と考えから暴力を排除して、平和を築く『平

和のモザイク』の一片となるよう、学び、関わることを求めている」と語られました。

講話の最後に、酒井司教は新しい回勅『マニフィカ・ウマニタス——人工知能の時代における人間の人格の擁護について』に触れ、この回勅への期待を語られました。軍事利用に突き進む AI の「武装解除」、AI 技術を一握りの国家や企業が独占する現実の中、「中立ではなく弱い者の側に立つ」教会が、「新しい技術に制約をかけても人間の尊厳を第一に考える」姿勢を教皇が示された意味の大きさを感じました。

【パネリス
トの前田しの
ぶさん】（紀の
川教会）は、
イポリト神父



（泉南教会）の親戚のアフォンゾ司教（54）が、6 月 6 日にモザンビークで殺された事件から語り始めました。日本ではなかなかピンときませんが、聖職者が命を狙われる現実が世界にはあり、対立を解決する手段として容易に暴力が用いられることに対する無力感。もっと身近な今の日本の政治や社会の先行きに不安や問題を感じていても、声をあげたり社会活動にまで手が回らない。助けを求めたい教会の現実は、多くの委員会の活動を数少ない高齢信徒が分担して、手いっぱい。せめて司祭の応援があればと思うけれど、司祭も忙しすぎて、すべての活動に薄く寄り添うのが精一杯という話に、多くの参加者が頷いているのが印象的でした。

もう一人の【パネリスト絹川誠さん】（枚方教会）は、衆議院の定数削減が少数派の存在、その声を無にする不安と、正解を学ぶことがメインの日本の学校教育の問題点から語りだしました。成人洗礼の彼は、最初は熱心に教会に通っていましたが、ミサの中で受け身の姿勢の自分に気づき、交わりや対話のない教会での時間に疑問を覚え、

足が遠ざかるようになりました。彼は今、「スターディーサークル」という活動の中で、知識や経験を対等に学び合う場を大切にしています。そこでは、対話を通じて『自分たちで創り出す』ものにこそ価値があり、自分たちの力で社会をより良くできるという「連帯」の感覚を取り戻すことを目指しています。



平和の学びへの応答を、二人のパネリストは自身の、教会の現実引き寄せて語ってくれました。会場を交えた【パネ

ルディスカッション】では、質問ではなく、ご自身の信仰観から平和を語る声が多く聞かれました。祈りの力を訴えられた方もあれば、教会という枠を越えて、平和を求める市民社会と手を合わせようという声まで様々ありました。率直なパネリストの声が、参加者の思いを呼び覚ましたように感じました。

以下、参加者の感想を少しだけ紹介します。

- *司教さまのお話、おもしろかったです。もっと教皇レオ 14 世の言葉を勉強したいです
- *わかちあいがとても良かった。情報を得たり学ぶことは個人でもできるが、様々な人たちと意見をわかちあうことで豊かな時を過ごすことができた。
- *リモート等の会議が多い中、やはり対面し、相手の温度を感じながらの対話が私は好きです。
- *ふだん小教区では聞けない声を聞くことができて良かったです。
- *教皇様の平和のメッセージが易しく解説され、回勅の重要箇所を理解できた。信徒の方々の問題提起は的確であり、教会が社会のために役割を果たしていくためにどうすればいいのか、改めて考える機会になった。
- *皆さん自分の意見を持つ、それが正しいのかはわからない。自分は今も迷っている。迷っているのでこれからも色々な集いに参加したい。
- *「平和」についてのわかちあい、とても良かったです。他の方の思いや考えをきくことで、自身の中にある思いも明確になります。個々の違

いはあっても、キリストのもとに一つに結ばれている兄弟姉妹であり、この思いが「平和」の礎になるのだと確信できました。

*戦争反対だが自衛のためのそれは仕方がない。抑止についてもっと研究すべきと思います。

*平和の理解がもっと進むように、教会内で様々な取り組みが行われますように。

*それぞれのわかちあいが面白かったです。シノドスの大事さを少し実感しました。中国籍の方の、教会の中での辛さなど、気づいていなかったもので。レオ 14 世の回勅の日本語版楽しみです。

*教会に貼られていたお知らせを見て参加しました。衆議院の定数削減は少数意見をくみあげない仕組みだと感じていたので、同じことを耳にして、考えさせられました。自分にも何かできることがあるはずと。

【事務局の気づき】

時間の制約で、講話、パネルディスカッション、わかちあいを 3 本柱とする企画はどれも不完全燃焼に終わった感はいなめません。それでも、感想の多くから、平和に向けての前向きな意思を感じ取ることができ、はじめの一步にはなったかなと感じています。

大阪の南地区では、次回の社会活動委員会の集まり（8 月 30 日・住之江教会）で同じテーマで学び直しの機会をもつそうです。回勅の日本語版が出たら、小さなグループでの読書会を開きたい、という声もありました。秋には、四国の皆さんと、同じテーマでテーブルを囲みたいと考えています。

「平和は、平和を奪われた人々の叫び声にわたしたちが耳を傾けるならば可能です。」

耳を傾けて心を震わせること。そして、学び、わかちあい、行動を決意して暮らしに戻ること。

このサイクルを地道に繰り返すことの大切さを改めて感じたつどいとなりました。



那覇教区のサマーキャンプ

那覇教区信徒 ^{やまだ けいこ} 山田 圭吾

1960年代、私が小学生だった頃、生まれ育った那覇市内の教会からコザ市（現沖縄市）内の泡瀬教会を訪問した。その教会にも同じような年代の子どもたちが沢山いて、見た目は外国人なのだが、英語ができず、日本語もあまり上手ではない。しかし、ウチナーグチ（沖縄語）の方が流暢だったので驚いた。

ベトナム戦争で亡くなったり本国に帰還したアメリカ人や、フィリピンから米軍基地で働くために来ていた人と結婚した沖縄人の母親は、生活のために仕事に追われ育児がほとんどできない。ウチナーグチしかできないおばあちゃんが育てているような状態なので会話は当然ウチナーグチになってしまう。その頃、私の通う那覇市内の小学校では「方言札」なるものがあり、方言（ウチナーグチ）を使うと首から札が下げられ、最後まで持っているとはツが与えられたのだ。そのため、高齢者の会話がわからず困ったこともあったのに、見た目は外国人の彼らが、日常会話でウチナーグチを使っていたのがうらやましくらいだったのだ。

この「方言札」は、「沖縄語を話すものはスパイとみなす」として、沖縄語しか話せない沖縄人を敵視していた日本軍のやったことが、戦後も引き継がれたのか、また、「日本に追いつけ、追い越せ」から「標準語励行」になり、行き過ぎて「方言禁止」となってしまっていたのだろう。その「方言札」のさらに怖いところは、自分が助かるためには、友人にわざとウチナーグチを使わせて「札」を渡し、「友人を売る」ようなことをしてしまうことだった。

さて、1960年代には、沖縄島北部にある恩納村に琉球教区（現那覇教区）の「黙想の家」が造られた。敷地内には「ミッションビーチ」があり、戦後の様々な混乱の中で、

貧しかった時代にお互い言葉も生活も違う環境にあった小学生から高校生までを対象にした「サマーキャンプ」が開催されるようになった。



「司祭、修道者への召命」を主目的に、「聖書や典礼の学び」はもちろん、娯楽の少なかった時代に連日海水浴も楽しむことができる内容も組まれていて、数日を楽しく過ごすことができた。普段は会う機会が少ない他教会の同年代の子どもたちが触れ合う機会があったことで、そこで友人関係も生まれ、毎年の再会を待ちわびるほどになっている。その中から、司祭、修道者が生まれ、そこでの出会いがきっかけとなって結婚した人たちもあり、今では子どもや孫たちも参加して家族同士で関わる事ができている。

運営のためには司祭団や修道者、信徒の方（ベトナムやフィリピン出身の方々も多い）等、各教会からの協力があり、教区の大切な行事の一つとして開催が続けられている。

ミッションビーチは一般にも開放されていて、時に巡礼で訪れる方たちの中には、海を見ながらミサを捧げたりすることもある。

ぜひ多くの方に訪問していただきたいと願っている。



子どもの命が狙われています ―― 「歴史の天使」の声が消えそうです

シナピス運営委員 にしぐち のぶゆき
西口 信幸

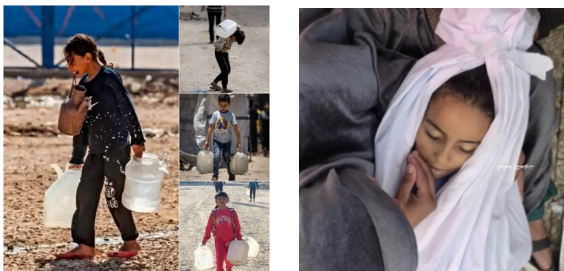


ガザ戦争が始まって1000日、街は完全に破壊されたままです。1万人の死体が埋まった瓦礫と廃棄物の山の隙間に、ネズミの住むテントの中で、人々は静寂と痛みの中で息を潜めています。停戦から10か月、撤退ラインは占領を広げる道具と化し、イスラエルは食糧・医療支援を妨害し、援助団体も入れず、民族滅亡の危機にあります。NHKなどメディアは、知っていながら、何も報じません。そんな中、国連は、94ページの報告書を作成し、子どもの「命の尊厳」を奪うジェノサイドとして、イスラエルを厳しく非難しました。子どもは「歴史を繋ぐ神さまからの使い」です。どうか目を向けてください。

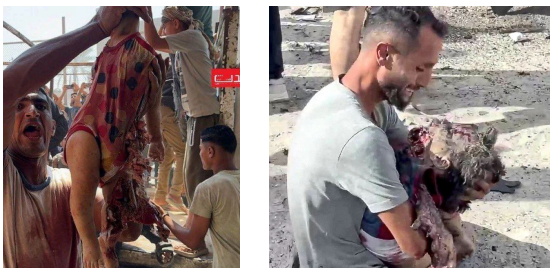
国連の特別調査委員会の報告書

イスラエルの行為は「パレスチナの社会基盤をむしばみ、民族として将来を決定する能力を弱体化させる」、意図的に子どもを標的にした大量虐殺（ジェノサイド）である。

水汲みに出た子どもを狙って、銃撃



子どもを狙って、学校やキャンプを攻撃



食糧の搬入を断って、子どもの飢餓



医療崩壊により、一生の傷となった手足



毎日、ドローン、ミサイル、子どもへの狙い撃ち、僅かな栄養による飢餓で、数十万人の子どもが、死と深刻な身体的・精神的な危機の中で、絶望し、多くの子どもが明日の希望が持てずにいます。自殺者も増えています。

それでも再び、希望を自ら見出し、歩き始めるのが「子ども」です。ガザの子どもアンワルは、切断された自分の脚に宛てて手紙を書きました。私たちには諦めることは許されません。

親愛なる私の脚へ

私はあなたを失ったとき、悲しくて、弱く、恥ずかしい気持ちになりました。何か大切なものが欠け、劣っているようで、何もできないと思えたからです。でも今日、私は強い人間になりました。あなたを見るたびに自信を感じます。外に出て、自分らしく、歩き始めました。両脚のある人にできないことです。今、あなたをととても愛しています。

ガザの大惨事は88年間、続いています。3年を経て今なお人としての尊厳を保とうと必死に生きるパレスチナの人々に私は胸打たれます。自由をはき違え、お金だけを中心にする世界に身を置く私たちに、歴史の証人として目を向けるようガザはいつまでも声を出し続けています。

召される日まで——私の在宅生活と信仰

枚方教会 みやなが ひさと 宮永 久人

6年前の2月15日土曜日、定年退職を目前にして自宅で倒れた。先天性脳性マヒの二次障害として頸椎が損壊し、脊髄損傷を負ってしまったのである。土曜日にヘルパーに来てもらっていたが、かねてからこうなることを想定していたのだろうか。前夜に部屋の鍵をかけ忘れたためにヘルパーが入ってきて救われた。なんという奇遇、奇跡。まさしく神の計らいだった。なるべくしてなった脊髄損傷だが、神の御心をそこに感じる。まだまだやるべきことが多々ある、多くの最重度障害者たちが歩んだのと同じ道を歩むようにと。

最初に関西医大に救急搬送されたときから、導尿カテーテルを挿入され、紙おむつを当てられた。臨終の日まで外すことができないだろう。iPS細胞による脊髄損傷の治療は今なお臨床試験段階であり、健康保険の適用対象になるまでにはまだ時間がかかる。人生は各自の時間的な限界とともにそれぞれの時代の制約も受けることをあらためて思う。

4泊後、主治医のいる茨木の北大阪ほうせんか病院へ救急搬送され、手術の提案もあったが、無理なことは避け、1カ月余りの急性期入院の後、地元の星ヶ丘医療センターのリハビリテーション科に転院。ここにも事前にかかって、カルテを作り、理学療法士と顔なじみになっていた。転院してからの私の担当になった女性の理学療法士の「あなたはまだまだ多くのことができる人だ」という励ましのことばを決して忘れない。

入院期間中に残念だったことは、症状や今後の展望について具体的な説明がなかったことである。結局は自分で学ばなければならない。脊髄損傷は手足のしびれ、四肢障害だけではない。膀胱、直腸の機能不全を伴う。訪問看護による導尿カテーテルと尿パックの装着と定期的な交換、膀胱洗浄と浣腸摘便が欠かせない。怖いのは尿路感染で、細菌がカテーテルを通して炎症を起こして発熱し、腎臓に達すると腎不全を引き起こす。頸椎症の治療・リハビリ期間中に2回罹患し、自宅復帰後4回罹患して星ヶ丘に入院している。

また、コロナが始まった時期だったために、医療従事者にマスクの着用が義務づけられ、難聴の私にはコミュニケーションが困難になってしまった。今でこそ筆談で対応してもらっているが、当時はそんな余裕はなかった。マスクの動きでことばを判断するしかない。

退院後、多くのヘルパーのもとで地域生活を営んでいる。6年間のなかで生活のパターンが定まった。平日の朝は訪問介護が訪問入浴で始まる。訪問看護のうち1回は土曜日の夕方に来てもらっている。日曜日に教会へ行くために前日の浣腸摘便は欠かせない。

在宅生活のなかでの困難は多々ある。その最たるものはヘルパーとのコミュニケーションである。ヘルパーたち全員が脳性マヒ者のことばをはじめから理解できるわけではない。この点、新しいヘルパーとの出会いは新鮮だが、出会いの当初は緊張をはらんでいる。しかも料理、書物の検索、パソコンのシステム操作等、専門知識がないとできないこともある。こういったところで合わないヘルパーはお断りすることもある。

しかし、いちばん問題なのはヘルパー自身や事業所に、障害者の自己決定権への理解が欠けることである。本人の意向を無視して親兄弟、子どもの意向を聞こうとする事業所があったのには閉口した。

1980年代に活発だった障害者解放運動が前提としていたのは、この自己決定権だった。この自己決定権にもとづき、様々な差別を打破し、障害者への設備的・精神的な障壁を取り除かねばならない(バリアフリー)。

在宅生活を始めてから数日後の土曜日の夕刻、私の iPad がけたたましく鳴った。Facebook のメッセージを通じた、大阪教区の手話ボランティア会、要約筆記グループのオンライン手話ミサへの誘いだっただ。コロナのパンデミックの中でオンラインシステムが広がったことが背景にある。救いが訪れた。私なりの信仰生活、教会との関わりが始まった。

オンラインであれば、私のような通常寝たきりの障害者・高齢者でも在宅のままでミサに与れる。そのオンラインミサでは「霊的聖体拝領の祈り」をもって聖体拝領に与ることになっている。ここには小さな共同体がある。病に倒れる以前から「大阪高松教区障がい者委員会」の委員を務めているが、こちらのほうもオンライン会議になった。新しい教会、福音宣教、信仰生活の形式として広がっていいと思う。

人類が感染症のたびに、それを英知をもって克服してきたことを思う。そのような人類学的視点が聖ヨハネ23世、聖ヨハネ・パウロ2世、フランシスコの各教皇にはあった。そして今日のレオ14世教皇にも。今、世界の政治家たちに必要なのはこの視点であろう。

退院後、身体も落ち着き、車いすの運転による外出に慣れた頃、意を決して枚方教会ひらかたの主日のミサにバスに乗って行った。久々に聖体に与った。私が倒れる以前に前田万葉大司教さまから「障害者がミサに与るのを助けるよう」通知があったこともあって、信徒会長の S さんたちが手伝ってくれるようになった。大司教さまに感謝したい。

私の支援者たちの中にはキリスト教関係者が数人いる。一時期カトリック信者の人もいた。そして退院当初からずっと6年間、エホバの証人の人も来ている。ヘルパーとしての立場上、宗教的な宣伝等は禁止されているが、議論はする。彼を通してエホバの証人の原理主義のなんたるかを知ることができた。しかし、私は彼の信仰を理屈の上だけで批判する気にはなれない。ことばよりも行い。6年間も長浜から通ってきてくれており、感謝している。

教会へ行くことは、少なくとも週1回の外出を義務づけることである。身体が動かなくなって家にこもりきりになると、交わりが少なくなり、コミュニケーションがなくなって、認知症へとつながってしまう。事実、母が施設の中でそうなってしまった。コロナのパンデミックで施設が閉鎖され、自身も骨折したのを機に認知症が一気に進んだ。それでも祈りや聖歌の文言を口ずさむ。信仰というものの、そしてそれを持つ者の強さを思う。

「愛と光の家」の創立者であり、聖痕を受けたマルタ・ロバンの神秘的霊性には私も憧れるが、霊性は人それぞれである。私は神をより知的に模索しつつ、神は現実の中にどのように介入されるのか探し求めている。解放の神学や障害者の神学の問いかけもそこにあるのだろう。

かくして、まさに今もパソコンのキーを右手の親指一本で打ち続ける。召される日まで。



投稿欄 ガリラヤの風

カンボジア巡礼の旅

堺教会・社会活動委員会 やまうち 山内 ます子

タイとカンボジアの国境紛争の最中に行った、カンボジアで考えたこと、思ったことです。

プノンペン郊外のごみ集積場に隣接する村にある施設の識字教室で、迎えてくれた子どもたちとの交流が忘れられません。

その村は、雨季になると泥水が屋内まで侵入してくるような場所で、ごみの中から現金化できる物を売って生活している家庭の子どもたちです。

キラキラした瞳で歓迎の気持ちを身体全体で表現し、迎えてくれました。大変な生活をしてきたでしょうに、本当に幸福そうで嬉しくなりました。

幸福感は感染します。「これからも、会う人に感染させてね」と、思わず口に出しそうになった交流でした。

日本の子どもは、豊かな生活をしているはずなのに、こんなに輝きのある瞳に会うことが少ないのは、どうしてだろうか・・・課題かもしれません。



トゥール・スレン刑務所跡地、キリングフィールドでは、人間の忌まわしい愚かさに恐怖と悲しみで凍り付き、声も出ず立ち尽くすのみでした。小部屋の鉄製の足枷、拷問器具、収容された人々の顔写真、殆どが罪のない一般庶民だったのに。

此処^{ここ}彼処^{かしこ}から、ゆらりと魂が立ち上りそうな錯覚に襲われ・・・街で出会う穏やかで優しい人達が、ほんの数十年前には残虐な行為を平気でしていた。

心の整理が今でもできずにいます。その時カンボジアに生まれていたらどうしたでしょうか。重い課題と、施設で迎えてくれた子どもたちに代表される「信じて希望を持ち^{たくま}しく生きる」ことを、深く祈り、考えていきたい。

人間は愚かで忌まわしい生物ですが、失敗しても新たに起き上がれる生物でもあります。

愚かな人間の見本のような私ですが、カンボジア巡礼でいただいた事、「信じられないのですが、お言葉でするので信じます」という言葉で終わりたいと思います。

実り多いカンボジアの旅でした。後半、酷い嘔吐と下痢で終わった旅でもありました。



感想をお送りくださった山内さんは、今年2月教区主催の「カンボジア巡礼」(協力:JLMM)に参加し、「平和旬間・月間」企画として、7月5日に堺教会で報告会をされました。



ことばを紡ぐ～言葉で遊ぶ

俳句を作って投句してみたら結構楽しいかも

ペンネーム「旅をする象」

愛媛県松山市は、同市出身の俳人「正岡子規」らを偲んで「俳都松山」を標榜し、俳句を町おこしや学校教育に取り入れ、広く普及に努めている。

その松山市が主催する人気のイベントに『俳句ポスト 365』がある。

毎月兼題(季語)を決めて俳句を募集し、ホームページ上で優秀句を発表する。「初級者向け」「中級者以上向け」と投句するポストを二つ用意して、初心者でも安心して投句できる仕組みになっている。

選者は、中級者組がプレバトの俳句コーナーでお馴染みの夏井^{なつ}いつき先生、初級者組は夏井先生の息子さんである俳人の家藤^{いえふじ}まさと^{まさと}さんが務めている。

ホームページ上の「投句はこちら」をクリックすると、その先は、自分の俳号(ペンネームみたいなもの)を決めて、作った俳句を入力してそのまま送信できるので、ハガキや応募用紙もいらず、簡単に参加することができる。

1カ月に一度投句の締め切りがあって、翌月ひと月掛けて審査をした後に結果が発表される。どちらのポストにも2千人を超える全国津々浦々の方から応募があって、3千句を超える作品の中から優秀句を選抜して発表する。

ただ、応募者の多さに恐れをなす必要は全くない。とくに初級者向けのポストは俳句としての型が出来ていれば、表現力とか描写力とかは洗練されていなくても兼題の季語を使って五七五のリズムで詠めていれば大丈夫。

毎月、千句を超える句が入選となっている。しかし、その上の優秀句に選ばれるのは大変で、20句から30句ほどの作品が厳選されて、その中の3句には発表時に家藤さんの講評がいただける。

ちなみに入選しても、優秀句に選ばれても、副賞は何もない。ただ自分の作品が掲載されたことが嬉しいのだ。

7月の兼題は「夏の山」。この季語を織り込んで私も応募してみた。

『源流を辿り五合目夏の山』(もちろん初級者ポスト)

8月末の結果発表で、この句が入選となったか、あるいは優秀句として表彰されたか、それとも選外になってガッカリしているか。皆さんと共に結果を待ちたい。

厳 肅 な 裁 判

ビスカルド あつこ 篤子

その日、私は法廷の証言台の前に立っていました。泥酔してスーパーで万引きをした人の情状証人として呼ばれたのです。

依頼を受けて裁判所に出向いた私は公判を傍聴して初めて彼の窃盗事件の全容を知りました。「被告人は泥酔してスーパーの弁当5個、計3400円相当を盗み、店を出たところ店員に呼び止められ逮捕に至ったもので云々」検察官の論告に対する弁護人の弁論は「泥酔して前後不覚の被告は空腹を覚えたが現金を所持しておらず弁当を盗んだところを店員に呼び止められると、その場で盗品を返し警察の調べにも素直に応じ、スーパーには弁償し談金も支払った。」そのような事件でした。

検察官は厳かに求刑文を読みます。「弁当を盗んだ被告の手口は大胆かつ巧妙で悪質であり」私は吹き出しそうになりました。巧妙？悪質？泥酔した高齢者が弁当をたくさん抱えてよろけながらレジを通らずに外に出た、大胆といえば大胆ですが、巧妙で悪質か？これは検察官のウケ狙いかと思いましたが、裁判官も弁護人も大真面目です。笑ったのは独り傍聴席に座っていた私だけでした。

なるほど、刑事裁判の論告は定型化されているのでしょう。膨大な類似事件の中身だけを上書きし、呪文のように淀みなくパターン化された文章をスラスラと読み上げ、裁判官も弁護人も耳にタコの定型文が読了されるのを待つ、公判とはそういうものなのでしょう。でも法曹界に縁のない市民なら誰もが「それ巧妙で悪質ですか」とツツコミを入れたくなるだろうと思いました。

要するに巷によくある刑事事件の裁判はベルトコンベアのように言葉が流れに乗せられて判決まで導かれるものなのでしょう。証人として質疑に答えた私も、その流れから逸脱した証言をしてはいけなかったのです。後に

なって気づいたことでした。

情状証人は質問に対して「はい」か「いいえ」で短く答えなければなりませんから、私も速やかに質問に答えていきました。ただ、「何故あなたは被告人の身元を引き受けようと思ったのですか」と尋ねられれば、「なぜなら」の説明が要りますから、その時だけは言葉を選びつつ被告人と私との25年の年月で築かれた関係性や経緯、彼の人となりなど、裁判官に知っておいてほしい背景事情を話しました。と、検察官が立ち上がり「すみません、証言の所要時間は10分を予定しているので」と遮りました。つまりそんな説明など不要なのです。私の発すべき回答は「身元を引き受け、更生させるよう努力します」が正解なのだ、それで情状証人の持ち時間は通訳含めて10分だ、不要な発言はするな、という顔をしていました。裁判官を見ると、彼女は私に「続けてください」と促し、私は「身元を引き受ける理由」を最後まで述べることができました。

裁判は終結しました。「被告人は証言台の前へ」と言われたその人は、足を引きずりながら時間をかけて椅子に座りました。「被告人、最後に何か言いたいことはありますか。」

彼は日本語で語りました。「私、肝硬変と糖尿病と心臓病と、あと、足ね、軟骨なくなって痛いので歩けないです。もう歳からね、残る時間ないです。あと、大阪戻って教会近く住んだらね、酒、飲まないです。」

判決は8月下旬です。



国際法にのっとってイラン人を保護しよう

40 年以上にわたる独裁のもと、弾圧と迫害に苦しんできたイランの人びとは、ずっと国際社会から圧力をかけてもらうことを望んできました。一時はトランプ大統領の決断に期待しましたが、今年3月以降の惨状を見たイラン人たちは、もはや希望を失い深く傷つくばかりです。

シナピスに身を寄せる彼らの多くは、もう何年も仮放免の身分に留め置かれています。長い人では 20 年以上も住民登録をさせてもらえません。このたびの政情悪化により、祖国に爆弾が落とされるたびに、私たちの仲間は、家族や親戚、友達の安否を気遣い、鬱々と引きこもりがち

になります。せめて就労許可があれば、がむしゃらに働いて考え込まずに頑張れそうですが、仕事もできず、運転免許更新すら認められなくなり「日本政府は俺たちが野垂れ死ぬのを待っているだけなのか」と言う声さえ聞こえます。

彼らのために私たちに今、何ができるか。そうだ、シリア人やウクライナ人に出されたのと同じ補完的保護を日本政府にお願いすることができないじゃないか。国際法に則り、戦争で帰国できない人びとに、せめて政情が安定するまでの期間でよいから日本政府に保護してもらい、日本社会の一員として暮らしてもらうのです。

日本にしながらできる国際支援活動を、ともに、今こそ！

カリタスジャパンが「ベネズエラ地震救援」募金の受付を開始しました。

6月24日、ベネズエラ北部で、マグニチュード7を超える2回の地震が起きてから1か月になります。7月17日現在(政府発表)、死者は5069人を超え、負傷者は16740人、家を失った人は2万人を超え、まだ多くの行方不明者が残ります。物的損害だけで370億ドル(5.9兆円)、復興資金は1000億ドルを必要とすると予測されています。

国際カリタスのネットワークでは、アメリカのCRS(カトリック・リリーフ・サービス)を中心にカリタスベネズエラが始めた救援活動を支援しています。被災地のラ・グアイラから首都カラカスまで79カ所の仮設避難所を作り、被災者の支援を続けています。

日本に届く報道では、社会主義政権の強権的な姿勢や腐敗のせいで、非常事態での政府の対応が遅れたことが指摘されがちですが、一方で、最大の支援は、アメリカによる経済制裁の解除という指摘もあります。イングランド銀行には、約20億ドル相当のベネズエラ資産が、経済制裁に同調した英国によって差し押さえられています。制裁によって、外国からベネズエラへ自由な送金ができないことも大きなネックになっています。



被災者支援と同時に、大震災が起きる前から続くベネズエラが置かれた
厳しい状況にも関心を持ち続けたいと思います。

郵便振替:00170-5-95979

加入者名:宗教法人カトリック中央協議会 カリタスジャパン

*記入欄に「ベネズエラ地震」と明記してください。

「ゆうちょダイレクト」ならびに他行からお振込みいただく場合は、カリタスジャパンのホームページ「募金の方法」をご覧ください。

私は平和の道具

I am an Instrument of Peace

思い出し Remembering

ともに歩み Walking Together

守る and Protecting

平和旬間月間が地区や小教区で行われています。
8月2週目以降に開催される企画を「シナピスの風」(教会掲示用)に掲載しています。それぞれの企画の詳細な内容などは、「教区報 8月号」や全小教区にお届けしている「平和旬間・月間 2026 案内集」をご覧ください。

「今こそ、戦争を未然に防ぐ」ために、ともに考え、行動しましょう。

*「平和旬間・月間 2026 案内集」は、
こちらの QR コードからも
ご覧いただけます。⇒ ⇒ ⇒
平和旬間月間事務局(シナピス) ☎06-6942-1784



シナピスホームカフェ おやすみの お知らせ

いつもシナピスカフェに訪問してくださり、
ありがとうございます。
カフェを可愛がっていただいているみなさまには
ご不便をおかけしております。
再開時期は未定ですが、またお知らせいたします。



シナピス夏季休暇

8月8日(土)～8月16日(日)

「ニュースレター配布停止」、「点訳版の郵送」をご希望の方はシナピスにご連絡ください。☎06-6942-1784

あとがき

フランスのバカロレア(大学入学資格のための国家試験)、すごい試験という噂は聞いていましたが、初めて実際の問題とやり方を知って驚きました。

「他者が不幸であるとき、自分は幸福になれるのか。」他にもっと難しそうな問いが2問。その3問から1つを選んで4時間の筆記式。これが全受験生に必須の哲学の試験なのです。(信じられない!!!)

受験生だけでなく、この日はフランス中で、この問いが話題になるそうです。フランスの教育相は、「相反する視点の吟味や議論を教育の核に据えるという、この国の選択を物語っている」と胸を張ります。

私はよく、自分の言葉で議論できているか不安に感じたり、誰かが絞り出した言葉を借りてばかりいる自分に気づかされます。それは私が受けた教育のせいも、少なからずあるのではと思っています。

きっと同じような教育を受けたであろう国会議員たちなので、誰かに書かせた原稿を堂々と読み合う、お芝居のようなことが国会でまかり通るのは、仕方がないのかもしれませんが。それならばもっと謙虚に、異なる意見や少数意見に耳を傾けて、哲学や信念に基づいた自分の言葉で議論を尽くしてから法律を作って欲しいものです。

バカロレアの最初の問いを話すと、日本には宮沢賢治がいるでしょう、と思い出させてくれる人が事務所にいました。少し救われた気がしました。(大森)

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等
社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ
機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆日本カトリック司教協議会との連携

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



●公共交通機関ご利用の場合

- JR 森ノ宮駅より 約 1000m
- 地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より 約 800m
- JR 玉造駅より 約 1000m
- 地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m

●車でお越しの場合

- 阪神高速 1 3 号東大阪線法円坂出口
法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

□郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪高松大司教区
代表役員 前田万葉

□三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪高松大司教区 シナピス
代表役員 前田万葉

□オンラインはこちら →→→

